

中国七夕の日本における受容

The Influence of Chinese Qixi Festival (Tanabata Festival) in Japan

吉村 誠*・殷 善培**

YOSHIMURA Makoto, YIN Shan-Pei

Abstract

The original myth and legend of Qixi Festival (Tanabata Festival) was developed into many ways, such as traditional events, routines, stories and poems. After imported into Japan, the original myth had a unique deployment. This thesis is mainly an overview about the deployment of traditional Tanabata Festival events in Japan.

In China, the names Qianniu (Hikoboshi) & Zhinv (Orihime) was already appeared in Zhou Period, and the Qixi Banquet Stories was considered to be completed in Han Period, and had named as Qiqiaodian (Kikouden). Additionally the Kikouden event was developed into the motif of poems, and also was merged with traditional Japanese Tanabata ballads before wildly spread. After, the Kikouden event was preformed by the royal court and the Samurai families. The nowadays Tanabata customs in Japan was started from the late Edo Period.

一 はじめに

牽牛星と織女星が聚会する「七夕」伝説は古代中国に始まるが、日本に与えた影響は大きい。7世紀中頃に中国からもたらされたと考えられる「七夕」は、現代でも風習や行事として残っていて、日本伝来後独自の展開を見せている。「七夕」の内容としては年中行事、風習、伝説、詩歌などにその様相を見ることが出来る。そこで本稿では、年中行事を中心に、中国における七夕の発生から日本に伝播した様相をとらえて、現代に至る過程を概観したい。

二 古代中国における七夕行事と伝説

中国において「牽牛」「織女」の名前が見える最も古い文献は、『詩経』である。「小雅大東」に以下のような一節がある。

維天有漢，監亦有光。

跂彼織女，終日七襄。

雖則七襄，不成報章。

皖彼牽牛，不以服箱。

(本文は「維基文庫」電子テキストに拠る)

天上には天の河がある。見ると光がある。

三星のあの織女は、一日中七回織物をしている。

一日に七回も機織りをするといっても、錦綾を作ってはくれない。

輝いている牽牛星は、車箱を付けて車を

* 山口大学教育学部

** 淡江大学文學院

引いてはくれない。(日本語訳は、『詩経 下』漢詩大系2 集英社1968.6 高田真治)による)。

「大東」は、西周の都鎬京を中心に西国の豊かなのに対して東国の窮乏を述べた詩で、掲げた部分は、第四章と五章の一部である。東の大小国の貧窮を訴えている部分であり、「天上には天の河があって、光輝いていると述べて、しかし我々には潤してくれない」ことを示す。織女星は、毛伝以下の「跂」の解釈が一樣に「三隅に三角をなして並ぶ様」とあり、上記漢詩大系『詩経』の該当箇所所引の『欽定詩経伝説彙纂』の図にも三星が描かれており、こと座の α 星であるベガ(織女星)と β 星、 γ 星を「三星が並んで見える」と表現したものである。現代では β 星と γ 星を織機と見なし、その前に坐る織女を α 星としている。「七襄」は諸説あるが、「織女が一日七度織機に登って機を織る(前掲書「漢詩大系2」高田真治)」と解するならば、「これは天上のことであって、東の国の人たちは織物も出来ない」と解釈し、貢ぎ物の織物もない窮乏を描く。牽牛は次の第五章に登場するが、「車箱を付けて貢ぎ物を運ばない」という文脈の中で示されており、貢ぎ物も献上出来ない東国の貧しさを言う。

本文の内容とは別にここで注目すべきは、牽牛、織女の名前があることである。そして天にある漢水に存在する二星が人格化されている。

なおここに掲げる「天有漢」は、他に「天漢」とも表記され、「天の漢水」を意味しており、具体的には「天の河」のことである。出石誠彦氏が、西から東に流れる中国の主な河にあって、揚子江支流の漢水(漢江)は、北から南流する河であるので、天上の南北に渡る天の河に比定されたのであろう(出石誠彦「牽牛織女説話の考察」『支那神話伝説の

研究』1973・11 中央公論社 以下出石氏の論はこの論文に拠る。)とする考えが妥当であろう。小島憲之氏は、これに加えて『詩経』「国風周南漢廣」に、

南有喬木，不可休思，
漢有遊女，不可求思，
漢之廣矣，不可泳思，
江之永矣，不可方思。

(本文は「維基文庫」電子テキストに拠る) 南方に喬木(大きく高い木)があって、雲表に聳ゆるという高い木であるから、その樹下の蔭に憩うことも出来ない。灌水のほとりに出遊する淑やかな娘があるが、気品が高くて、近づき誘うことも出来ない。

漢水は広々として、泳いで往くことも出来ない。

江水は長く流れて、筏に乗っても往けず、ますます以てその女に近づきたい。(日本語訳は上記『詩経 上』漢詩大系1に拠る)。

を引用して、この詩を漢水地方の恋愛歌としながらも、この遊女は神女と見る説があることなどから、漢水のほとりに男女の情詩や伝説があったことを伺わせるとされ、牽牛織女伝説の素地があるとされる(小島憲之『上代日本文学と中国文学 中』1977年9月 塙書房)。

また前漢の戴徳の著になる『大戴礼記』所引の夏の歴書であるとされる『夏小正』七月の条に「初昏織女正東郷」とあり、織女牽牛聚会を思わせる記述がある。一方『史記』「天官書」に、「牽牛為犠牲。其北河鼓。河鼓大星，上將；左右，左右將。婺女，其北織女。織女，天女孫也。」とあり、牽牛織女の名前が見える。またその後文に「旱。正月，與斗，牽牛晨出東方，名曰監徳。色蒼蒼有光。其失次，有應見柳。歲早，水；晚。」とあり、「以二月

與婺女、虛、危晨出，曰降入。大有光。其失次，有應見張。名曰降入 其歲大水。」「以七月與東井、輿鬼晨出，曰大音。昭昭白。其失次，有應見牽牛。」（『史記』引用の本文は「維基文庫」電子テキストに拠る）と見えている。出石誠彦氏はこうした中ですでに牽牛織女聚会説話の存在を推定されているが、文面を見る限りまだ確定的なことは言えない。その他『淮南子』佚文に織女の記述が見えているが、信憑性は低い。

『文選』所収、後漢の班孟堅の「西都賦」の中に、

集乎豫章之宇，臨乎昆明之池。左牽牛而右織女，似雲漢之無涯。茂樹蔭蔚，芳草被隄。蘭苕發色，曄曄猗猗。若摛錦布繡，潑耀乎其陂。（本文は「維基文庫」電子テキストに拠る）

天子は豫章の屋形に着き、昆明の池に行けば、牽牛の像を左に織女の像を右にして、天の川のように果てしなく続いています。木々は鬱蒼と茂り合い、かぐわしい草は堤を覆い、蘭や苕の香り草は鮮やかな色をあげ、花は輝き、葉は美しく、にしきを延べ縫い取りを敷いたように、その堤に照り輝いています。（日本語訳は、『文選一』全釈漢文大系26 集英社 1974年6月 小尾郊一 に拠る）。

とあり、その李善注に

三輔黃圖曰：上林有豫章觀。漢書曰：武帝發謫吏穿昆明池。漢宮闕疏曰：昆明池有二石人，牽牛、織女象。（本文は「維基文庫」電子テキストに拠る）

とある。小南一郎氏は、七夕聚会伝説の成立には西王母と東王公の男女二神の逢会信仰があつて、道教の影響もあつて牽牛織女逢会が七月七日となつていったのではないかと推論されている。その論の中で50年ほど前に昆明池畔から二体の石像が発見されていることを

紹介され、漢代には七夕聚会説話が成立していたと推定されている（「西王母と七夕伝承」『東方学報』46冊 1974年3月。後に「西王母と七夕伝承」1991年6月 平凡社に収載）。「西都賦」は上林苑の昆明池の中の豫章館の風景を描写している部分であり、二像設置の背後に聚会説話があるかどうかは不明であるが、現代に残る西王母の石像を博搜された中での精緻な論であり傾聴に値する。

同じ『文選』の古詩一九首の中の次の詩は、確実に聚会説話を基本としている。

迢迢牽牛星，皎皎河漢女。
織織擢素手，札札弄機杼。
終日不成章，泣涕零如雨。
河漢清且淺，相去復幾許。
盈盈一水間，脈脈不得語。

（本文は「維基文庫」電子テキストに拠る）

ひこ星ははるかかなたにあり、こちらには織り姫がきらめく。織り姫はきゃしゃな白い手を抜きだして、さっさと音立てながら、機のを動かしている。だが、ひこ星を思うままに、ひねもす織り続けても、あやができあがらず、涙が続いて、雨のようにしとど落ちる。天の川は、澄んでいてそのうえ浅く、それに互いの距離は、どれほどもない。とはいえ、一筋の川があ、水をたたえて隔てているからには、じっと見交わすだけで、話し合うこともできない。（日本語訳は上記『文選四』に拠る）。

織女の立場で、牽牛と日常会えない嘆きを歌ったものであり、背景として聚会説話が成立していたことを示すものである。この古詩一九首は漢代まで溯ると見られており、先掲の『夏小正』七月の記事と考え合わせて、七夕聚会伝説もその頃に成立していたと見てよいであろう。詩そのものは閨怨詩の類に入るので、『玉台新詠』にも「雜誌八首」の中

に採録されており、七夕詩の源流として六朝時代に展開するものである。

また後漢の崔寔の『四民月令』に

七月七日、曝經書、設酒脯時果、散香粉於筵上、祈請於河鼓織女、言此二星神當會、守夜者咸懷私願、或云、見天漢中、有奕奕正白氣、如地河之波、輝輝有光曜五色、以此為徵應、見者便拜乞願、三年乃得。(『藝文類聚』歲時部中 七月七日))
(本文は「維基文庫」電子テキストに拠る)

とあり、二星への祈願、聚会のことが記されている。

これらのことから、おおざっぱに見れば、聚会説話はほぼこの詩の前時代の後漢頃にはまとまりを見せてきたと推定してよいであろう。

そしてもっとも明快に記されているのは、梁宗懐著の『荆楚素歳時記』である。

七月七日、爲牽牛・織女聚會之夜。

按戴德夏小正云、「是月織女向東」。蓋言星也。『春秋斗運樞』云、牽牛神名略。『石氏星經』云、牽牛名天關。『佐助記』云、織女神名取陰。『史記』天官書云、是天帝外孫。傳玄『擬天問』云、七月七日、牽牛織女、會天河。此即其事也。舊說天河與海通。近世有人居海渚者。每年八月、有浮槎、去來不失期。人、有奇志。立飛閣于槎上、多齋糧、乘槎而去。

十余月至一處。有城郭狀、屋舍甚嚴。遙望宮中有織婦、見一丈夫牽牛渚次、飲之。牽牛人、乃驚問曰、何由至此。此人爲說來意、并問此是何處。答云、君還至蜀都、訪嚴君平則知之。竟不上岸。因還如期。後、至蜀、問君平。君平曰、某年某月、有客星犯牽牛宿。計年月、正此人至天河時也。牽牛星、荊州、呼爲河鼓、主關梁。織女則主瓜果。嘗見道書云、牽牛、娶織女、借天帝二萬錢下禮。久不還、被驅在

營室中。河鼓、黃姑牽牛也。皆語之轉。

(本文は「『荆楚素歳時記校注』毓榮 文史哲大系6 文津出版(台湾)1977年8月」に拠る)。

かなり引用が長くなったが、聚会のことが明確に述べられている。また後半部分は、補足に記載される張騫が河源を尋ねた話と類似性を持っており、蜀の嚴君平にまつわる話として派生したものであろう。後代に黄河源流は天河に通じるとされた元ともなっているものである。

聚会説話の成因は出石誠彦氏がまとめられている諸説や氏自身の論があるが、ここでは省略することにする。ただ牽牛が農耕労働者、織女は桑蚕と関係していると見られる性格は、農桑生産社会を基盤とした思想がその背後にあるととらえられる。また先述したように聚会の日が7月7日であるとされる要因に道教が関わっていたらしい(小南一郎 前掲論文)。

同じ『荆楚素歳時記』に

天河東有織女。天帝之子也。年年機杼勞役。織成雲錦天衣。天帝哀其獨處、許配河西牽牛郎。嫁役遂廢織紵。天帝怒責、令歸河東、唯每年七月七日夜、渡河一会。

とあるという報告(小南一郎前掲書掲載「中国民間文学史初稿」『北京師範大学中文系五王級学生篇』1958 など)もあり、『述異記』などにも同文が見えるが、現行『荆楚素歳時記』には見えず、何に拠ったのであるかは不明という(小南一郎前掲書)。なお前掲『北京師範大学中文系五王級学生篇』1958には、後世の文人の補筆であるとしてこの文に対して否定的な見方をしている。

そして同じく『荆楚素歳時記』でもう一つ重要なことは、次に見える「乞巧奠」の記述である。

是夕、人家婦女、結綵縷、穿七孔針、或

以金銀鑰石為針、陳几筵酒脯瓜果於庭中、以乞巧。有喜子網於瓜上、則以為符應。按『世王伝』曰、竇后、少小頭禿、不為家人所齒。遇七月七日夜、人皆、看織女、獨不許后出。乃有神光照室。為后之瑞。宋孝武七夕詩云。迎風披綵縷、向月貫玄針是也。『周処風土記』曰、七月七日、其夜、灑掃庭中、露施几筵、設酒脯・時果、散香粉于筵上、以祀河鼓即牽牛也織女。言此二星神当会。守夜者、咸懷私願。或云、見天漢中有奕奕白氣。或光耀五色、以為徵応、[見者] 便拜得福。然則中庭祈願其旧俗歟。(本文は同上に拠る)。

女子の裁縫上達を願う行事として織女星を祀る風習が記載されている。出石誠彦氏は、元来七月七日に限った行事ではなかったが、二星聚会の願望の達成にあやかりたいという希望に基づくものとされる。美しい色とりどりの糸を結んで、針を刺し、庭前に筵を引いた机を置き、酒、瓜などを置いて裁縫上達を願うという内容で、蜘蛛が網を張ると願いが叶うというものである。後に唐の玄宗皇帝が楊貴妃と行った行事は有名である。

この「乞巧奠」行事が日本にも入って、七夕行事として宮廷で行われるようになるが、次に述べる。

三 日本への伝播と行事の展開

中国古代において発生、成立した牽牛織女の聚会伝説と『乞巧奠』行事がいつ頃日本に入ったかは厳密には不明である。上記漢籍や『藝文類聚』などは舒明朝の遣唐使などによってもたらされていたことは十分に考えられるので、早くから宮廷人たちの目には触れていたであろう。しかしそれが行事として行われ、また詩歌に詠まれるというのはしばらく後のことである。

『万葉集』の次の歌は、七夕伝説を対象にしていると思われ、作歌年代は天武朝と思われるので、七夕歌としては初見である。従って天武天皇の時代にはすでに定着してきたことがわかる。

天漢 安川原 定而神競者磨待無 (巻10・2033 「七夕」人麻呂歌集)

此歌一首庚辰年作之

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

人麻呂歌集所出歌である。歌は一、二句は「天の河安の河原に」と訓めるが、三句以降は難訓であり定訓を見ない。「七夕」の表題の中にあり、七夕歌であることは確実である。この歌にのみ左注があり、「庚申年」と作歌時を干支で記されており、天武九年(680)を指している。となると天武九年には確実に七夕歌が存在していたことが知られる。

ただここで注意すべきは、「タナバタ」の訓は、機織りを行う女性の意味の「織女」にのみ確実であり、「七夕」の訓としては不明確であることである。『万葉集』における「タナバタ」と訓める原文は、「多奈波多(巻17・3900)」、「棚機(巻10・2034)」、「棚幡(巻10・2063)」の三例であり残り八例は「織女」とあり、そのうち五例が「たなばたつめ」と訓んでいる。また原文で「七夕」とあるのは、巻10・2032と2057の歌本文と題詞に10箇所見られる。歌本文は、「ナヌカノヨ(巻10・2032)」、「ナナヨ(巻10・2057)」と訓むのが一般的であり、「タナバタ」とは訓めない。題詞の訓読は正確には不明であり、多くの注釈書は「シチセキ」、「ナナユフ」と訓む。「七夕」を「たなばた」と訓み、また意味的にも七日の夜を「タナバタ」を指すようになったのは、平安時代の後期からであると久保木哲夫氏は論じる(久保木哲夫『「七夕」』と『織女』—『たなばた』表記考—『国語と国文学』2014年7月 『「たなばた」—語義の変容—』

『和歌文学研究』110号 2014年6月)。氏は平安時代の歌集や文献を博搜されて、「寛和二年内裏歌合」の十巻本と二十巻本とのあいだで「たなばた」と訓む箇所を「織女」と「七夕」という表記の混交があることと、『伊勢集』には「七夕つめ」とあることや、『小大君集』には織女のことを「七夕」と表記され、「たなばた」と訓む以外に方法がないことを根拠として、ほぼこの本が記述された平安後期頃に「七夕」を「たなばた」と訓むようになったとされる。またそれにとともなう意味の変容も具体的な文献から実証されている。これらのものは成立も含めて筆録時期の文献であるので確実であろう。

織女を「タナバタ」と訓むのは、古代歌謡に「織女」の意味で「タナバタ」と訓む例があるからである。『古事記』天若彦の状に以下のような歌謡がある。

天なるや 弟棚機の 項がせる 玉の御
統 御統に 穴玉はや み谷 二渡ら
す 阿治志貴高日子根の神ぞ。
(阿米那流夜 淤登多那婆多能 宇那
賀世流 多麻能美須麻流 美須 麻流
迹 阿那陀麻波夜 美多迹 布多和多
良須 阿治志貴多迦 比古泥能迦微
曾)

とうたひき。此の歌は夷振なり。

『日本書紀』にも同様の所伝と歌謡がある。中つ国平定の命を受けて高天原から派遣された天若彦は役目を忘れてしまい、高天原の制裁を受けて死ぬ。その葬式の時に死者天若彦と間違われた阿治志貴高日子根神は怒って、葬儀場を壊し飛び去ってしまう。そこで阿治志貴高日子根神の妹高比売命(『日本書紀』には妻下照比売)がこの神の名前を知らせようとして詠んだのがこの歌謡であると記紀に説明される。

この歌謡は「夷振」という宮廷歌曲の名前

が付いているが、少なくとも中国の織女伝説が到来する以前からある歌謡であろう。従ってここに見える弟棚機の名前は、中国の織女とは異なる概念である。ここから和語としての「たなばた」は、本来は織機のことを指し、その棚機(たなばた)で機織りをする女性のことを「たなばたつめ(女)」と呼んでいたのが「たなばた」で織女のことを指すようになったことが知られる。

この歌謡の構成は前半部が織女の項に懸けている首飾りの玉に糸を通すために空けられた穴を序として 瞬時に谷を駆けめぐる阿治志貴高日子根神の状態を述べることによって、名前を示すという形になっている。蛇体神であり雷神でもあるこの神の性格の分析は今は触れないとして、棚機との関係は、早くに折口信夫が指摘し(「水の女」その他『折口信夫全集1』)、土橋寛氏が解説されたように(土橋寛『古代歌謡全註釈』1977年6月 角川書店)、棚機がこの神を迎える巫女としての性格を持っていることを示したものであると言える。

従って山路平四郎氏も触れるように(山路平四郎『記紀歌謡評釈』1973年9月 東京堂出版)、この歌謡は元来は阿治志貴高日子根神を讃美する目的で歌われたものであって、記紀の所伝に挿入されたものと思われる。

このように見ると、中国の織女聚会説話が日本に流入した時には、「たなばた」と呼ばれる巫女としての神女の伝承があり、そこに中国の織女が習合し、織女が「たなばた」と訓まれるようになったものであることが知られる。

さて『日本書紀』には

(持統5年7月)丙子(7日)に、公卿に宴したまふ。仍りて朝服賜ふ。

(持統6年7月)庚子(7日)に、公卿に宴したまふ。

と二箇所に宴のことが見えるが、七夕宴かどうかは不明である。

七夕詩作の場についての初見は、『続日本紀』天平六年の七月七日の記事である。

秋七月丙寅（7日）、天皇觀相撲戲、是夕徙御南苑、命文人賦七夕之詩、賜祿有差

聖武天皇が相撲を觀た後、夕方から七夕を題とする詩を作らせている。また天平十年にも七月七日に行事の様子が記されている。

秋七月癸酉（7日）、天皇御大藏省覽相撲、晚頭轉御西池宮、因指殿前梅樹、勅右衛士督下道朝臣眞備及諸才子曰、人皆有志、所好不同、朕去春欲翫此樹、而未及賞翫、花葉遽落、意甚惜焉、宜各賦春意詠此梅樹、文人卅人奉詔賦之、因賜五位已上：廿疋、六位已下各六疋

しかし、この記事は、昼の相撲に続いて詩作の会が行われているが、七夕を題とすることとは無関係である。『万葉集』において大伴家持がこの時に「独り」で七夕歌を詠んでいる様子が見られる。

（天平）十年七月七日之夜獨仰天漢聊述懷一首

たなばたし、ふなのりすらし、まそかがみ、きよきつくよに、くもたちわたる
多奈波多之 船乘須良之 麻蘇鏡 吉欲
伎月夜尔 雲起和多流

右一首大伴宿祢家持作

この歌の内容については、以前に述べたことがあるが（吉村誠 「天平十年作七夕歌一首—『清き月夜に雲立ち渡る』の表現—」『大伴家持と奈良朝和歌』2001年9月 おうふう）、この時は家持は21歳（養老二年出生説による）であり、内舎人として宮廷に出仕するかしないかの時で、「獨」と題詞にあることから、おそらく宮廷とは別の場で漢詩に倣って独自に詠んだものであろう。

七月七日は、宮廷では相撲節会が一般的で、溯ること『皇極紀』元年七月九日、『天武紀』十一年七月七月三日に見える。また『万葉集』では天平二年吉田宜から大伴旅人に宛てた返書（巻5・884）における相撲部領使や、天平三年の相撲使（巻5・886）にその様子が伺われる。

詩歌としては『懷風藻』や『万葉集』に七夕を主題とする詩歌が数多く見られ、それらは宴席などで詠まれたものと思われる。『懷風藻』には三首の五言詩が見られ、藤原不比等や房前、吉田宜といった奈良時代初期の人たちの詩が見える。しかし長屋王宅での私宴の時の作とも見られ、宮廷での作ではない。宮廷行事としては昼は相撲の節会となっており、七夕行事はみられない。

平安時代に入って、『日本後期』には、

大同三年七月丁亥（七日）幸神泉苑觀相撲、令文人賦七夕詩。

弘仁三年七月癸亥（七日）幸神泉苑觀相撲、令文人賦七夕詩。

とあり、相撲の行事に続いて七夕詩を作らせている様子が見られる。

七夕行事の「乞巧奠」は平安時代になると見られるので、平安時代初期は、相撲節会の後に七夕行事が行われていたことが知られる。しかし次第に七夕行事が中心になっていったらしい。『延喜式』織部司に

七月七日織女祭。五色薄繩各一尺、木綿八兩、紙廿張、米、酒、小麥各一斗、鹽一升、鰻、堅魚、脯各一斤、海藻二斤、土椀十六口、【加盤】坏十口、席二枚、食薦二枚、錢卅文。

右料物、請諸司辨備。造棚三基。【二基司家料、一基臨時所料。】祭官一人、祭郎一人、供事祭所。祭郎先以供神物、次第列棚上。祭官稱再拜、祝詞訖、亦稱再拜、次稱禮畢。

とあり、織女を祭る行事の規定がある。そして『西京雜記』『江家次第』『東宮年中行事』などの平安時代の有職の書には、「乞巧奠」のことが見えており、夕方より行われていたことが知られる。

天永2（1111）年に成立した大江匡房の著になる『江家次第』では、清涼殿東庭に長い筵を置いて、朱塗りの什器に果物、干鯛、針などを供え、箏の琴をそれぞれの調子に合わせて三張設置して、天皇が二星の会合を見るとある。またそれは諒闇や穢時にもかかわらず行われ、雨天の場合は仁寿殿西庇の下になる。終夜藏人、雑色が束帯を着用して近侍すとある。その供え物の詳しい図がほぼ同時代に記された『雲図抄』に見えている。これと同様な様子は平安末期の日記である『知信朝臣記』にもあり、伝統的な方法として定着していたようである。

一方で相撲節会については、『類聚国史』には

天長三年六月三日 改七月七日相撲、定十六日、避国忌也。

とあり、同七月一六日には、「御豊樂殿、覽相撲」と見えており、その後天長六～十年、承和元年まで記述があるが、以降記録に見られない。従って平安中期以降、七月七日は乞巧奠が中心となり、相撲節会は衰えていったと見られる。

中世に入り、『建武年中行事』や『体源抄』などにも「乞巧奠」行事のことは見えており、箏の琴を演奏する様子が伺われる。

夜に入て乞巧奠あり、庭に机四をたて、燈台九本をの々々とし火あり、机に色々の物すへたり、しやう（箏）の（琴）柱たて、これををく、つくゑの火とりに夜もすがら空たきあり、陰陽寮ときをそうすことちに三の様有、ね（音）は盤涉調、半呂半律あきのしらべなり、しる人

すくなし、

『建武年中行事』の七月七日の項である。秋の曲調を演奏する様子が記されている。

また伏見宮貞成親王の日記である『看聞日記』の応永二十三年（1416）、二十四年の記事には、法楽を行う様子が描かれ、屏風をしつらえて、多くの寺院による献花の様子が描かれている。また中山定親の日記である『薩戒記』にも後小松院の泉殿に献花の様子が記される。

一方武家故実の口伝書として知られる『定助雜記』（元龜元年（1570）頃成立）には

七夕に梶の葉に御歌被遊候御事候哉、七夕の御会は面向に而御座候。梶の葉に御歌被遊候御事は、内々の御事候哉、梶葉七枚に御歌をあそばされ、やねへ後向れて打上られ候、何も内々に而の御事に而候。

とあり、七枚の梶の葉に歌を記す行事が記されている。このことは、『年中定例記』や『年中恒例記』にも載せられており、『後水尾院当時年中行事』に詳しくその様子がしるされている。『洞中年中行事』も同様のことが記されており、本来宮中で行われるようになった方法が武家にも入ってきた様子が伺われる。

注目すべきは、江戸時代後期の松平定信等の編になる『幕朝年中行事歌合中』一二番の記述である。

六日のゆふべより、さゝ竹に願いの糸をかけ短冊などにものかきて星に備へ、管弦の具など手向るこ事、乞巧奠をまねびし也。

江戸幕府の七夕行事であり、各大名、旗本もこれに倣ったと考えられる。水戸徳川家の年中行事を記した『水戸歳時記』にも同様の行事内容が記されている。従って武家では宮中の乞巧奠行事の方法に倣い、管弦の楽器や

糸などを供えることをしているが、笹竹に糸や短冊を懸けて星に願い事を掲げるという点では新しい展開を見せている。ただこのことが次に示す江戸庶民の行った方法につながっており、現代でも行われる風習にもなっているものである。

天保元年（1830）に書かれた喜多村信節の随筆『嬉遊笑覧』六下児戯に

江戸にて近ころ文政二三年の頃より七夕の短冊作る篠に、種々の物を色紙にて張り手つるす、其頃はなべてせしにはあらざりし、只浜町辺の町屋などにて見しが、今は大かた江戸の内、せぬ所もなきやうなり。

とあり、同様に斎藤月岑編天保九年（1898）成立の『東都歳時記三』七月六日に

今朝未明より、每家屋上に短冊竹を立てること繁く市中には工を尽くして、いろいろの作り物をこしらへ、竹とともに高く出して、人の見ものとする事、近年のならばし也。

と記されている。また『守貞漫稿』二七に拠ると、手習いの子どもたちが五色の短冊に和歌を書いたらしい。

これを見ると、江戸後期より、主に子どもの祭りとして、笹竹に短冊や飾り物をして軒に掲げるという風習が生まれたようである。そのもととなっているのは、幕府を中心とした武家の七夕の供え方が関与しており、さらにそのもとは宮中における乞巧奠であることが知られる。もちろんそれと平行して宮中や幕府でもそれぞれの乞巧奠行事は行われており、現代でも五撰家の一つであった冷泉家の行事は有名である。

現代では童謡「たなばたさま」に代表されるように、主に子どもの行事（風習）として、笹竹に願い事を書いた短冊や様々な七夕飾りをつけて軒に掲げるといのは、この江戸後

期から起こったものである。童謡「たなばたさま」は、権藤はなよ、林柳波作詞、下総侃腕一作曲になるもので、昭和十六年（1941）三月発行の『うたのほん下』国民学校初等科第二学年用に書かれたものらしい。

ちなみに「たなばたさま」の歌詞を掲げておく。

笹の葉さ～らさら、軒端に揺れる
お星さまき～らきら、金銀砂子
五色の短冊、私が書いた
お星さまき～らきら、空から見てる

現代では主に幼稚園や保育園でこの歌を歌い、笹竹に短冊や飾りをつける行事が行われている。

また地方には、七夕にまつわる独自の行事が残されている。長野から山梨にかけての七夕人形や、宮城県仙台の七夕祭。青森のねぶた祭りも七夕と関係している。これらのものは、七夕と水と関係したものであるが、詳しくはまた別に機会があれば論じたい。

四 まとめ

以上、七夕伝説の成立や行事について、中国から日本への受容を中心に通覧してきた。七夕伝説は日本においても様々な説話を生み、中世の御伽草子を始め、各地の伝説となって残されている。また日中双方の漢詩や万葉集以降の和歌となって文学創作の対象ともされてきた。今それらのものをすべて論じることが出来ないが、一年に一度の逢会という牽牛織女の物語は、天上の星へのロマン性もあって、人々の心を捉えて離さないものである。

今後、機会があれば、さらに説話の展開や文学への享受などを詳しく論じてみたいと思う。

『日本書紀』『続日本紀』『延喜式』の本文は、『国史大系』吉川弘文館のテキストによる。平安朝以降の文献は、『古事類苑』に拠るところが多い。

(2015年11月 稿)

〈著者略歴〉

吉村誠（よしむら まこと）

専門は『万葉集』の文学論的研究。博士（文学）。現職山口大学教育学部教授。主な著書。『大伴家持と奈良朝和歌』（2001 おうふう）『へたな人生論より万葉集』（2009 河出書房新社）